



集まった老人たち。儀礼の算段をみんなで相談している



村で行事があるとき、いつも最初に老人たちに食事と酒がふるまわれる

疾く死なばや

数年前に北タイの山地で出会ったアカの老人が忘れられない。八〇歳を超えたその老人が阿片常用者であることは、青ざめた顔色とやせこけた体つきから隠しようもなかった。老人は、長年の喫煙の習慣ゆえ肺が悪く、ある日、隣家に住み込んでいたわたしのところに薬を所望に来た。

「弟よ。胸がゼーゼーと鳴ってとても苦しい。なにか薬を分けてくれ。そうしないとわたしは死んでしまうよ」

わたしは、あまりに具合が悪そうな様子になんとかしてあげたかったが、あいにくその症状に効きそうな薬は持ち合わせていなかった。とこ

ろがそれ以来、老人はほぼ毎日、日課のようにわたしのところを訪れるのだ。

「弟よ。今日もわたしは具合が悪いよ。おまえの薬でどうにかしてくれ。でないと死んでしまう」。しかし、わたしに頼んでもどうにもならないことを悟ってか、老人の言葉は月日を経るごとに、「どうにかしてくれ」から「どうにか早く死にたい」という独り語りに変わっていった。

「ああ、苦しい。こうなったら早く死にたいよ」「わたしはもう生きていたくない。早く死んでしまいたい」

そして村人たちは、「あの人自身も、われわれみんなも、あの人がもうすぐ死ぬのはわかっているんだ。その準備もしているよ。だからおまえもあの人の独り語りにつきあうのはほとんど

にな」と淡々と言うのだ。結局、この老人はそれから一年ほど生き延びた。死の直前にも、わたしのところにやつのことで歩いてくるなりべたりと座りこみ、同じ言葉を述べたものである。

老いを生きる

老人がいよいよ衰弱し、今日か明日かという状態に至ったときのことを思い出す。老人は、かつて村長をつとめたことがあり、さらにアカの儀礼や宗教について卓越した知識をもっていたので、アカの社会で一目置かれていた。そこで近隣遠方からわりなく親類縁者や知人がいる村に使いが出されて死の予兆が伝えられた。村の内外から老人の家に集まってきた大勢の縁者らは、当の老人に対する最後の「精力をつけさせる儀礼」の様子を静かに見守った。そして死の当日。一族を今日まで支えたひとりの偉大な人物の死は、集まった者たちに大きな悲しみをもたらした。

老人が亡くなるまでのあいだに、わたしは死をめぐるとくさんのことがらを老人から教えられた。死は肉体がなくなるといふひとつの通過点に過ぎない。死はほんのひとときの状態なのだ。死のあとには、冥界で祖霊としての長い「人生」がはじまるのだから。

老人は、恐ろしがることも嘆くこともなかった。死が確実に自分に訪れると悟つてからはそれを受け入れたし、死を待ち焦がれてさえいた。祖霊になり、子孫を見守り、子孫から手厚くまつられることに喜びを見出していった。

冥界に行くためには、老いることが必要な過程である。しかし、ただ老いればいいというわけではない。「よく老いる」ことが冥界への道を開く。夫婦仲よく暮らし、子孫を残すこと。今日

魂の役目

冥界に行きついた魂は、折にふれて家にあらわれる。子孫が憂いなく暮らしているか、見るためである。そのとき子孫は、祖先に献上する食べ物や飲み物を用意することに腐心する。粗相があれば、祖先からそっぽを向かれてしまい、安寧な暮らしが保証されなくなるからだ。日々の暮らしのなかで、祖先に見守られているという感じが子孫に計り知れない安心感を与える。死は、残された者たちにとつては悲しいできごとだが、その悲しみは日々を生き抜く力に遠からず転化されていくのである。

ところが最近では、老いても死も安心して迎えられなくなりつつある。老いて死のうにも、それを受け入れる子孫がすでにいないこともあるからである。たとえばここ数年、タイで社会問題になっている覚醒剤にからんで、多くの若い世代が命を落としたり刑務所に入った。農業をいくらか続けてもいた現金は稼げない。ならばと、違法だがうまくいけば巨額の現金を稼げる覚醒剤の売買に手を染める者、現実逃避や快楽のために服用して中毒になる者があとを絶たない。また、仕事や学業などのために都市へ出て行った若年層も戻つてきそうにない。残っているのは老人ばかりという村は多い。

冥界に行きついた老人はいつまで子孫を見守りつつけられるのだろうか。



棺は太いオガタノキをくり抜いて作られる。縦1.5m、横0.6m、脚の部分も含めると高さ1.5mほどもある。冥界へ飛ぶ鳥にたとえられる



葬式の一場面。棺の前で、冥界へ行くためのまじないの言葉が述べられる



棺の運び出し。墓地に埋葬された故人の魂は祖霊になり、後に家に戻ってくる



故人に水牛を供養する。水牛は冥界への旅程での食料になる

死を願う人

見ごろ・
食べごろ
人類学

清水郁郎

(しみず いくろう)

大同工業大学助教授